

書評

富永京子著 『社会運動と若者——日常と出来事を往還する政治』

橋口 昌治ⁱ

はじめに

本書の書評会が行われた学而館は、以前は研究棟で、評者が2003年の大学院入学から10年ほど出入りしていた場所であった。またそこは、研究室であると同時に学内における運動の拠点でもあり、学費値下げや非常勤講師の雇い止め、学内の管理強化や安倍晋三の来学など、課題が持ち上がるたびに集まり、会議を行ったりした。

そのような場所であったので、学内で自由にビラを貼れなくなっても学而館の掲示板上には様々な活動のビラが貼られ続けた。そして、あまり剥がされないので年輪のように積み重なっていった。みんな貼りたいビラをどんどん貼っていくので、これとこれが同じ掲示板上に貼ってあるのかという面白さもあり、研究に疲れたときに、なんとなく掲示板上を眺めることもあった。しかし博士課程修了後、段々と足が遠のき、拠点として使うこともなくなっていった。

今回書評会で久しぶりに学而館に行くことになったので、掲示板上を見に行った。「さすがにビラは全部剥がされているだろう」と思っていたら、掲示板上と剥がされていて笑ってしまった。剥がした跡も、上からペンキが塗られることなく壁に残っており、その残骸は、見た目を気にする立命館大学において異様であった。そして本書『社会運動と若者』は、

そのような状況において書かれた本なのだった。

評者は2000年代前半から様々な運動に関わっており、書評をするにあたって、その振り返りが必要だろうと感じた。そこで概要を紹介したのち、2011年以前と以後の運動の連続性と非連続性という観点から簡単に運動史を振り返り、本書について論じたい。

概要

本書は、2015年に安保法案に反対する運動を展開した SEALDs を主な対象として、「若者の社会運動」の規範や作法（＝社会運動サブカルチャー）がどのように形成されるのかを分析したものである。問題意識や分析枠組の書かれた前半（序章から第二章）とインタビュー調査の結果を分析した後半（第三章から終章）に分かれている。

筆者の問題意識が端的に書かれているのが、第一章「若者と社会運動、社会運動と若者」のまとめの部分にあたる「本研究の分析視角」という節であり、その冒頭を引用する。

ここまで、社会運動論の中で「変数の布置と連関」を問う研究と、「変数の作用」を問う研究を検討し、その中で若者運動がどのように扱われてきたのかを明らかにしてきた。その上で本書は経験運動論の潮流を引き継ぐものであり、二〇一一年以降に生じた、特定秘密保護法反対運動や安保法案に対する抗議行動といった「若者を主な担い手とする社会運

i 立命館大学大学院先端総合学術研究科修了、
団体職員

動」を、サブカルチャー化した社会運動の一種と捉える。(49-50頁)

まず筆者は先行研究の検討を行い、資源や動員構造、認知的解放といった変数の組み合わせとして社会運動を捉えた資源動員論などを「変数の布置と連関」を問う研究と分類する。それらは組織的・集合的行動の変容と諸変数との関連から、社会運動の発生や発展、帰結を説明しようとしてきた。次に、それと異なるアプローチとして、「新しい社会運動論」を「変数の作用」を問う研究と分類する。それは現代社会のどのような特質が人々を社会運動に参加させるのかを問い、高度に発展した産業社会において、物質的な豊かさを求める労働運動からエコロジーやフェミニズムといった精神的な豊かさを求める運動へと中心的な運動がシフトしたと論じた。豊かな時代とされる1960年代以降の学生運動・若者運動も、新しい社会運動論の主題となってきた。そして、あらかじめ運動として明確に位置づけられる「組織」を研究対象とする資源動員論に対して、新しい社会運動論は、運動として論じられなかったような行為や、それを形成する主題、担い手のあり方に注目するという点に特徴があり、学習会や日常のライフスタイル実践なども運動として論じてきた。

筆者が引き継ぐ「経験運動論」も、組織よりも担い手のあり方、個人の経験や感情に着目するものである。しかし新しい社会運動論や集合行動論のように集団内の画一性を前提としていない点で、個人化・流動化した現代社会に対応しようとしている。経験運動論を確立したマクドナルドは、もはや「集合的アイデンティティ」が成立しえないというメルッチの議論を踏まえ、出自や社会的立場ではなく、その場その時において集合した人々が「経験」を共有することによって運動が成り立つと論じた。筆者も、個人化の進んだ日本では経験運動論が有効であると考えている。一方、経験運動論が参加者の多様性を強調する点を批判し、「運動の場が一定の規範や秩序によって保たれる限り、参加者の多様性は何

らかの形で制限されるのではないか」(37頁)、「経験運動論の担い手である若者たちは、なぜ個人化・流動化しているにもかかわらず、共通の居場所で語り合い、学び合い、芸術や消費をともにし得るのだろうか」(40頁)と問い、彼らの共有する規範や作法(=社会運動サブカルチャー)がどのように形成されるのかを分析することが本書の課題であると明示される。

引用した文章に出てくる「サブカルチャー化した社会運動」とは、筆者が前著から掲げてきた概念であり、「世代や問題意識を共有していたとしても、趣味や嗜好、自己認識がある程度同じでなければ一緒に運動をすることができない」(42頁)状況における社会運動のあり方を指している。逆に言えば、趣味や嗜好を共有していれば世代が異なっても一緒に運動をすることができるのである。むしろ筆者は、ある種の「社会運動サブカルチャー」を共有した人々が「若者の社会運動」と名指されている運動の担い手であるとし、その「若者」の中には、SEALDsより年長の者が多いと思われる首都圏反原発連合やC.R.A.Cも含まれると論じる。そして、多様な背景を持つ運動参加者がサブカルチャーを共有・生成しながら「若者」像を再カテゴリー化することによって社会運動を駆動する事態が、2000年代の反貧困運動、そして2011年以降に生じた「若者を主な担い手とする社会運動」においても見られたと指摘する。

その担い手が共有する「社会運動サブカルチャー」を明らかにするために、筆者はSEALDsのメンバーを中心とする「若者」にインタビューを行い、得られたデータを「出来事」と「日常」という2つの観点から分析している。「出来事」は、デモなど予め時間や場所を定めて行うものであり、動員論的な社会運動論が対象としたような「組織」的な活動に対応する。さらに、それは本番である「フロントステージ」(デモ、学習会など)と準備段階である「バックステージ」(フライヤーのデザイン、参加の呼びかけなど)に分けられる。「日常」は、組織とは

関係なく個人が自らの生活を営むものであり、経験運動論などの行為論的な社会運動論が対象とした「個人」的な活動に対応する。「日常」と「出来事」を分け、その「往還」（「日常」で培われた問題意識が組織的な活動に反映され、逆に活動における「出来事」が「日常」に反映される）を描出することによって、「社会運動サブカルチャー」の形成過程を分析するというのが筆者の採用した方法である。また、「組織」と「個人」ではなく「出来事」と「日常」という用語を選んだ理由として、一時的な「プロジェクト」のような運動や『「組織」なき運動』が台頭している現代の社会運動を担う若者たちにおいて、「組織」の重要性はなくなっており、「出来事」と「日常」という分類の方がリアリティに肉薄した実態把握が可能になると考えたからだと述べられる。そして、「フロントステージ」と「バックステージ」という分類によって、運動への多様な参加のあり方（デモにだけ参加する、裏方に徹するなど）やそこに見ることのできる「こだわり」を描き出せると考えたという。

以上のような問題意識と方法に基づき、インタビューデータが分析されるのが第三章以下である。第三章「出来事としての社会運動」では、まず「フロントステージ」のうちの「デモ・集会・街宣（街頭宣伝）」におけるスピーチや主催者・参加者のインタビューの分析を通して、主催側の「普通」や「共感」「統一感」へのこだわりと、それに対する一部参加者の違和感（ここでは「特殊」「解放」「自由」が対置される）が示される。ただし両者の共通の背景として政治について語りにくい「日常」があり、それが一方で他者の共感を得やすいデザインされた統一感のあるデモとして、一方でデモにおいて「自由にできない日常から『解放』され、自主的に表現したい気持ち」（92頁）として現れるのだと整理される。そして「学習会・研究会・シンポジウム」で年長世代の活動家と接することで培われる「既存の『社会運動』に対する忌避感や抵抗感」が、デザインされた運動によって「普通さ」を体現したいという

主催側の思いの要因になっていると論じられる。

第二節では、「フロントステージ」の準備段階である「バックステージ」の分析が行われる。準備段階こそ運動でこだわっているものが何かが現れ、また「人々が日常で培った問題意識を、同じく日常を通じて得たさまざまな資源を調達しながら出来事へと反映させる」という点で、『出来事』と『日常』をつなぐ過程であると説明される。まず明確なメンバーシップのない「組織のオーガニゼーション」のあり方が明らかにされ、それにもかかわらずなげ運営・意志決定が可能になっているのかと筆者は問い、ある種のポップカルチャーや人文・社会科学系学問などが「わかる人」に共有された規範なり作法（社会運動サブカルチャー）があるのではないかと、それがパロディやオマージュを多用する「イメージコントロール」にも現れているのではないかと論じられる。

第四章「日常としての社会運動」では、活動参加者の社会運動や政治に対する見方がどのように形成されたのか、家族や学校との関係から分析され、政治や社会運動について語ることをタブー視する人々とのディスコミュニケーションを多く経験していることが、『「楽しく』『運動色のない』フロントステージ』へのこだわりにつながっているのではないかと筆者は論じる。

第五章「日常と出来事をめぐって」では、「政治的無関心」、「異質性と同質性」、「出来事と日常」という3つの観点から「若者の社会運動」の「社会運動サブカルチャー」について論じられる。まず第一節「学校化された政治的無関心」では、活動参加者が「勉強」にこだわる理由が、将来のキャリアが確定せず自分の立ち位置が変わりうる「若者」たちは当事者意識を持ちにくく、政治に関わる際に「当事者意識の醸成」よりも「知識の蓄積」を選ぶのだと説明される。次に第二節「個人の尊重と組織の放棄」では、若者たちが「組織」を嫌う理由について、「他人の事情や優先すべきものは、自分にはわからないし、まったく異なる他人に対して『組織』の論理を

押し付けるわけにいかないという『個人化』時代の若者たちの身の処し方があるのではないかと分析され、「ルールやサンクションに代わる運営のやり方の模索」に「若者たちが直面した『個人』と『組織』をめぐるジレンマの難しさ」を見出している。第三節「劇的でも危険でもない運動」では、瀬戸内寂聴の「青春は恋と革命だ!」という発言や運動をドラマチックに描こうとする年長世代の活動家に対して違和感が表明されたことなどを根拠に、「若者たち」が自分たちの運動を日常の延長として位置付けることにこだわっていること、その理由として社会運動が忌避される理由を「危険」で「怖い」非日常的なものであると分析していることが明らかにされる。

終章「考察と結論」で筆者は、「『若者の社会運動』は、どこまでが現代の若者のもつ世代的・属性的などのような特質によって規定され、どこからがそうとはいえないような性質によって出来ているのだろうか」という問いを設定する。そして「論じたものの整理」を踏まえ、「差異化としてのサブカルチャーを超えて」において上記の問いに答えている。第一に、「若者たち」は「知ること」に重点を置いていたが、「こうしたモラトリアムとしての学生像は彼らの親世代からすでに始まっているのであって、現代の社会運動を担う若者に特有だとは言えない」と結論づけられる。第二に、「若者たち」は「組織」を拒否し、「当事者」としての立場を重要視する傾向があるが、これも他の年代においても見られる傾向であるとされる。第三に、「若者たち」は日常の延長として運動を行おうとしていたが、これも日本社会の幅広い層が持っている社会運動への忌避感や恐怖感の反映であり、彼ら特有の感覚ではないとし、以下のように議論がまとめられる。

まとめると、本書で対象とした若者の社会運動は、モラトリアムや個人主義といった若者をめぐる社会変容の影響や、世代的な要因によって説明される要素がないわけではない。しかしそれは、二〇一一年

以降を生きる若者たちだけでなく、彼らより上の世代においても同様にみられた特徴である。その点で、二〇一一年以降にみられた若者中心の社会運動が、特定の世代に固有だとする世代論的批評は部分的に誤った主張をしていると主張できる。さらに指摘しておくとして、その新しさやスタイリッシュさを特徴として論じられた「若者の社会運動」が、古臭く、ダサイとされる「既存の社会運動」に対するカウンターであったり、差異化の産物にすぎないかといえは決してそれだけではない。若者たちは日常の政治的ディスコミュニケーションという体験から、政治に関心をもたない人々に問題意識を伝えようとするために運動をデザインした結果、それが「新しい」社会運動となったのだ。(241-2頁)

このような結論を踏まえ筆者は、「担い手」と「社会運動の文化」を峻別して論じるという新しい方法論を提示したことを「本書の貢献」として挙げ、また出自や属性に基づく同一性が自明でない個人化した現代社会において、「個人の背後に存在する集団」を想定することは、現代の社会運動に不可欠なプロセスであり、「若者」はそのような「集団」としての意味を持ったのだと最後に指摘する。

本書の意義と課題

本書は、周到な先行研究のまとめを踏まえた上で新しい方法論を提示した点で、今後の社会運動研究が参照すべきものになっている。また多くの興味深い事例を引き出したインタビュー結果は、SEALDsを中心とする国会前抗議行動に関心を持つ人々にとって必読であろう。しかし上記の引用で「彼らより上の世代においても同様にみられた特徴」と述べているように、2011年以降の「若者の社会運動」において共有されているサブカルチャーの特徴を明らかにすることはできておらず、結論は曖昧である。それはなぜか？この点について考察することを抜きに、本書の意義と課題を論じることはできない。

評者は、研究対象を明確にする作業が十分に行われなかったことによって結論が曖昧になったと考える。筆者は「二〇一一年以降に生じた（…）『若者を主な担い手とする社会運動』」を研究対象に据えているが、2011年以前と以後で日本の社会運動の何が変わり、何が変わらなかったのか十分な検討を行なっておらず、また「若者」の範囲も年齢で区切るのか「社会運動サブカルチャー」を共有している人々で区切るのか一貫していない。

評者は、「社会運動サブカルチャー」という概念およびその形成過程を解明する方法論は、2011年以降の運動状況を捉える上で意義のものであると考えている。しかし、2011年以前と以後の運動の連続性と非連続性を捉える視点が弱いこと、「若者」にとらわれ調査対象を狭くしてしまったことによって、筆者はその有効性を十分に引き出せていないと考える。それを書評会では①ビッグイベントの比較、②デモの変質、③人間関係、④「若者」への強い関心の4点に分けて説明したが、本稿では②、③、④、①の順で論じていく。

2011年以前も以後も、サウンドデモが最も訴求力のあるデモの形態であるが、その性質は変化している。本書では、危険ではない運動を志向するSEALDsがサウンドデモを行うことに対して特に注釈など付けられていないが、そもそもサウンドデモは逮捕されない安全なデモではなかった。むしろ「誰でも参加できる」ことを謳ったピースパレードに対するアンチテーゼとして、警察との軋轢を回避しないことを志向していたため、逮捕者が続出した（noiz『「サウンドデモ」史考』『アナキズム』第12号）。この経緯を簡単に振り返ると、まず2001年9月11日のアメリカ・同時多発テロ以降、平和運動の担い手として登場したのはワールドピースナウやCHANCE！など「反戦デモ」ではなく「ピースパレード」を行うグループであった（CHANCE！はデザインに力を入れていたグループで、有事法制に反対するWho is YUJIというキャンペーンは、supremeを思わせる赤地に白抜き文字が入ったバナーをフ

ライヤーに用いるなど、おしゃれな運動として評価されていた。その問題意識と実践はSEALDsと重なるものがあった¹⁾。「反戦」ではなく「ピース」を前面に掲げ、謝辞の対象に警察を入れたりする運営には、デモにおける表現の自由を自ら規制していくものだとする批判があった。それに対抗するかたちで「戦争反対・路上解放」を掲げて登場したのがサウンドデモで、当初は警察の弾圧が繰り返され、不当逮捕が続いた（とはいえ警察はピースパレードも弾圧している）。サウンドデモに対する大きな弾圧は、2008年の洞爺湖サミットに反対するデモに対するものが最後であったように思う。それ以後は、フリーター全般労働組合がメーデーで行うものを中心に、サウンドデモはレパトリーの一つとして定着していった。

表現への規制に対する反発を契機にサウンドデモが発展してきたように、2000年代においてデモは表現や解放の手段でもあった。例えば京都にあったグループ「反戦と生活のための表現解放行動」の名にそれがよく現れている。それに対して2011年以降は、「原発の再稼働を止める」「安保法制を可決させない」というように敵手・目的が明確になり、それに向け資源をいかに合理的に活用するかに重きが置かれるようになったと評者は感じている。また中心的な担い手も、だめ連の系譜を継ぐような学生運動経験者から、勤め人や個人事業主として生計を立ててきた実務的な人々に移ったように見える。そしてそのような人々を担い手として、「誰でも参加できる」ことを重視するピースパレードのようなサウンドデモや抗議行動が行われるようになったのである。しかし新旧のサウンドデモでは表現に対する考え方が異なる。本書でも触れられている野間易通と二木信の噛み合わなさの背景には、このような運動文化（本書の概念を用いれば「社会運動サブカルチャー」）の違いがある。

そして、運動の担い手、デモや抗議行動の目的と手法に関して大きな変動が生じたことは、2011年以降の運動におけるコンフリクトの大きな原因となっ

た。いわゆる「3.11以降の運動」の捉え方によって崩れた人間関係をいくつか知っている。評者も、2011年以後に新しい出会いがあった一方、気まづくなった人もおり、「分かり合えなさ」を何度も感じた。ただ、2011年以前に一緒に運動をしていた人々がみな11年以後の運動に否定的な評価をしているわけではない。年長者で肯定的な人もいれば、若い世代で否定的な人もいた。その差異を生む要因を明らかにするとき、「分かり合える」ことを強調する経験運動論への批判から「分かり合えない」ことも包含し、かつ理論(理屈)のみならず感情や審美眼の差異をも射程に入れた社会運動サブカルチャー概念は、恐らく有効である。それゆえ、筆者が調査対象者をSEALDsのメンバーやその同世代の人々に限定したことはもったいないと感じた。

それは筆者が「若者の社会運動」という枠組み、世間一般的な問題意識にとらわれすぎたためだと思われる。まさに本書が書かれたように、「若者」への強い関心は11年以前から続いている。評者は11年3月に『若者の労働運動』を出したが、現在関わっている最賃引き上げを求めるエキタスの活動では「若者」を超えた連帯のあり方を模索している。実際エキタスのメンバーの年齢層は幅広い。しかしメディアは「若者の運動」としてエキタスを見ており、運動側もそのストーリーに乗って活動を展開してきた(その結果、新聞記事で評者の年齢(当時39歳)を見た人が「エキタスって若者の運動じゃなかったの? w」といったツイートをする事態が生じる)。筆者による「多様な背景を持つ運動参加者がサブカルチャーを共有・生成しながら「若者」像を再カテゴリー化することによって社会運動を駆動する事態」という分析は、このような現状を言い当てている。しかし本書のインタビューを読む限り、調査対象者たちは「若者」という集合的アイデンティティを持っているように読めず、それを求めているようにも読めない。例えば100頁あたりに記述された勉強会における年長者とのやりとりは、「どんなに『若い人』っぽくないことを言ったとしても」若者と

して扱われることへの違和感が「逃げられないんだよね」といった表現で語られている。

むしろ「国民舐めんな」というシュプレヒコールに現れていたように、国会前抗議行動で見られた「集団」は「若者」というより「国民」であった。筆者の概念を借用すれば、戦後日本の社会運動における「ハイカルチャー」である「護憲」「反戦平和」という立場を表明したからこそ、SEALDsは「国民」を名乗る正当性と広範な支持を得られたと考えられる。2015年9月2日に出された「自由と民主主義のための学生緊急行動(SEALDs)戦後70年宣言文」は、彼らなりに戦後日本という国の正史を書き、「戦後」という物語を再生産しようするものであったと解釈できる。一方、「国民」の多用や「生活保守」的なスピーチは、護憲・平和という価値観を共有しながらも、国民国家批判やジェンダー論などの人文・社会科学系学問が「わかる人」たちからの強い反発を生んだ。そこで見られた「こだわり」の分化は、年齢で説明できるものでなかったように思うが、「若者」ととらわれることなく国会前抗議行動で起こったことを見ていけば、社会運動サブカルチャー概念を用いて、その分化のメカニズムや「分かり合えなさ」の分析ができていたかもしれない。

最後に、筆者が「組織」と「個人」ではなく「出来事」と「日常」という分類を選んだことについて触れたい。2000年代以降の運動の特徴は、「路上」が主要な運動の舞台になり、そこで活躍した個人が巨大組織も持ち得ない政治的影響力を持つようになったことである。しかしそれは、「素人の乱」や「若者の労働運動」が生まれた背景を見れば分かるように、職場からはもちろん大学からも運動が排除された結果、街に出ざるを得なかった側面もある。本書では、活動に関わる時間が「出来事(非日常)」として扱われ、往還はあるが、「日常」と切り離されたものとして捉えられている。これは、職場や大学など生活の場における日常的な活動の延長にデモのような非日常的な活動があった環境が、ほとんど失われてしまった現状の反映だと思われる。その「日常」

は、前著『社会運動のサブカルチャー化』で描かれた活動家の「日常」とも異なる。本書の調査対象者の語る「日常の延長としての運動」や「当事者性」へのこだわりは、日常的な活動や組織という媒介なしに一足飛びに国会前という政治の中心に踏み込んだ個々人の政治的主体性の模索として読めると感じた。

一方、書評会では①ビッグイベントの比較ということで、「年越し派遣村」と国会前抗議行動の共通点を、公共空間の一時的な占拠による国家中枢に対する直接的で持続的な示威行動とそれに対する大衆的な支持を背景に、湯浅誠や奥田愛基というカリスマ的存在が中心となって、超党派の議員の協力を引き出したことにあると指摘した。湯浅が中心にいた反貧困運動は、直接行動によって得たインパクトを継続的なものにするために運動から政治へと重心の移動を求められたが、そのことによって運動の持っていたダイナミズムを失い、組織・政治に埋没してしまうというジレンマを抱えてしまった²⁾。しかしそれは、市民連合や野党共闘、エキタスなど国会前抗議行動以後の様々な運動にも共通して見られる課題であり、組織に対する個人の優位を前提に両者を対立的に見る運動文化、社会運動論の見直しも必要になっている。

結論

以上、雑駁に論じてきたが、本書の主題についてはもっと論じられるべき点が残っており、今後の筆者の研究の発展を期待したい。

注

- 1) CHANCE!については、『アナキズム』第12号（アナキズム誌編集委員会、2009）に掲載されたnoiz氏の論考のほか、ウェブ上の「ユー・ジョー・セーってなに?」（きんようブログ、<http://www.kinyobi.co.jp/blog/?p=1511>）、「2002年5月3日憲法集会 CHANCE!」（許すな!憲法改悪・市民連絡会、<http://web-saiyuki.net/kenpoh/meeting/2002/meet46.html>）、「3500人のお金で紙面を買った全面広告」（下村健一の『眼のツケドコロ』、<http://shimomuraken1.sakura.ne.jp/www/old/ken1-eye/2001-2002/020518.html>）などで読むことができる。
- 2) 原田峻・高木竜輔・松谷満・申琪榮・樋口直人・稲葉奈々子・成元哲、2012、「政権交代と社会運動をめぐるイシュー・アテンション——民主党政権前後を事例として」『茨城大学人文学部紀要・人文コミュニケーション学科論集』Vol.13、131-162頁。